

## こだま Q&amp;A



## Q49

血中アンモニアの検体は、なぜ除蛋白液の入った専用容器に採り、氷水中に浸して提出しなければならないのですか。

## A49

生体中では、アンモニアは蛋白やアミノ酸から生成されますが、肝臓で代謝・解毒され排泄されています。また、赤血球中のアンモニア濃度は血漿中の約3倍高いと言われていています。この反応は採血後も採血管内で持続しており、検体を放置すると赤血球からのアンモニア遊離や、蛋白・アミノ酸からのアンモニア生成により測定値が上昇します。

上記のことから、本来、血中アンモニアの検体は、採血後に除蛋白液と混合した後、“速やかに遠心分離”して上清を分離するのが理想とされています。しかし当検査センターにご依頼の場合は、“速やかに遠心分離”することは難しく、そのため、できるだけ正確に血中アンモニア値を測定するためにも、以下の点に留意していただくことが必要となります。

①採血は除蛋白液入りの専用容器に採取します。

(⇒これにより、検体中の蛋白やアミノ酸が除去されます。)

②採血後すぐに氷水中に浸します。

(⇒これにより、採血管内でのアンモニア生成反応が抑えられます。)

できるだけ正確な検査データをお返すためにも、上記①②を守っていただき、速やかにご提出いただきますよう、ご協力のほどよろしくお願い致します。

お問合せ：☎代表 0120-14-7191(フリーダイヤル) / 082-247-7191(ダイヤルイン)



きやつちボール

今月号の検査室発の記事では、「尿沈渣における上皮細胞の出現とその鑑別」と題して上皮細胞の出現意義や鑑別ポイントについて取り上げました。医療機関様も尿沈渣を見られる機会があると思いますので、少しでもお役に立てれば幸いです。

尿沈渣は、形態検査では珍しく固定なしの生標本で観察する検査です。人間の体内にある姿そのままが凝縮されて観察されるため、今後新たな発見や臨床に有益な情報を発信できる可能性を秘めています。尿一般係では、その可能性を模索しつつ、少しでも多くの臨床に役立つ情報を提供できるよう日々努力をしておりますので、今後ともご指導よろしくお願い致します。

榎本 健 (検査科学術・精度管理担当副技師長 兼 尿一般係係長)

## 広報委員

谷敷 圭美 / 亀石 猛 / 熊川 良則 / 片山 智恵子 / 初岡 博 / 高磨 潤